



「群馬だより」

嶋田 久夫

三年半の札幌生活を終えて、群馬県の高崎市に帰ってから早一年が過ぎようとしています。群馬でも様々な環境問題が存在しており、色々な人たちが日々かかわっています。その中で、昨年いくつかの動きのあったダム問題について報告したいと思います。

群馬県は、ご存じのように戦後、福田、中曽根、小淵という三人の首相を出してきた保守王国です。昨年の衆議院選挙でも小選挙区は自民党が独占しています。ですから、「上州人は、義理と人情と自民党」と常々いわれています。隣の栃木県や脱ダム宣言を出した長野県が県営ダム建設を中止しても、「脱ダムなんてたわごとを言うヤツは群馬県民じゃないべー。この群馬で、ダムが止まるわけがないがネー」などと役人たちがタカをくくっている土地柄なのです。大規模公共工事の歯車が回り始めると、群馬では悲しいかな、止める政治

もないし仕組みもなかったのです。しかし、昨年、その群馬で二つのダムが相次いで見直しされることになりました。一つは、県営の「倉洲ダム」で、もう一つは国営の「戸倉ダム」です。

倉洲ダムは、高崎市の西方にある倉洲村内を流れる利根川の支流である倉洲川に建設を予定されているダムです。すでに周辺の整備工事が終わり、本体工事にとりかかる段階に至っていました。高崎市周辺に住民を中心に四つのグループが結成されて、県に対し公開討論を呼びかけるなど積極的な活動を展開していました。そうした中で、昨年十二月、県知事は厳しい県財政の現状と水需要の後退を理由として、ダム建設の「凍結」を正式に表明しました。本体工事がしばらくストップしたままでしたので、この結論はある程度予想されていたのですが、「ダムが止まるわけがないがネー」とうそぶいていた役人には、かなりショックを与えたようです。中止ではなく凍結という点で不透明感が残りますが、凍結を解除するには住民への説明と同意が必要となり、そう簡単に解除はできないでしょう。

知事の凍結宣言が議会で出された直ぐ後で、今度は国が戸倉ダムの「中止」を正式に決定するという出来事が起きました。戸倉ダムは、群馬県の北の方、高層湿原で

有名な尾瀬の入り口である片品村に建設を予定されていたダムです。戸倉川をせき止めて、その水を東京都、埼玉県が利水として使うことが大きな目的とされていました。しかし、東京都と埼玉県は、水需要を大幅に見直し、利水からの撤退を次々と表明したため、国が建設中止に追い込まれたのです。

しかし、国直轄の「ハツ場ダム」は工事が中断する気配はありません。ハツ場ダムは戦後直ぐに計画された大規模ダムで、「西の川辺川ダム、東のハツ場ダム」といわれてきました。反対運動が激化した時期もありましたが、あまりにも長い時の経過の中で運動は下火となっていてのが現状です。上述の二つのダムが凍結あるいは中止となった大きな背景として水需要の後退と建設費用の増大という事情があります。今後、地方には未曾有の財政難がやって来るといわれており、費用の増大は地方にとって実に頭の痛い問題となっています。ハツ場ダムも当初計画が見直され、総事業費が四、六〇〇億円と倍以上にふくらみました。これによって地方の負担も増加するので、この点からダム建設の見直しの気運が盛り上がってくることも強く予想されるところです。まだまだストップをかける余地はあると考えているところです。